博士（文　学）　齊　藤　大　紀

学位論文題名

沈　従　文

――作家の形成――

学位論文内容の要旨

本論文は、近代中国の代表的な作家、沈従文（しんじゅうぶん 1902-1988）の初期の作品を取り上げ、その作家としての形成の過程を論じたものである。

沈従文は湖南省の出身で、小学卒業後、軍隊に入り、のちに上京、北京大学の聴講生となるかたわら、新聞、雑誌への投稿を開始し、1920年代から40年代にかけて、精力的な文学活動を展開する。辺境の町を舞台に若い男女の恋を描いた代表作『辺城』（1933-34）、『従文自伝』（1930）等、故郷の自然と人物に取材した作品によって、国内外に多くの愛読者をもつ一方、一貫して魯迅あるいは左翼作家とは異なる立場をとったため、抗日戦争終結後から人民共和国成立前後にかけて、厳しい批判にさらされ、創作を断念、近年の改革開放の動きの中でようやく名誉を回復するに至った作家である。「文章の魔術師」の異名が示す通り、沈の作品は極めてイメージ力の強い、不思議な魅力に満ちることで知られるが、本論文は、その文章のもつ「魔力」の解明と、作家像の修正、および作品群の意味づけの変更を究極の目標としつつ、沈従文が作家としての形成期において、いかにして独自の新鮮な表現を獲得していったかを明らかにしようとするものである。

論文はまず序章において、1920年代の中国と北京の状況を概説し、沈従文の生涯および代表作を紹介したのち、以下のように展開する。

第一章「中国と日本における沈従文研究」では、中国と日本を中心に、沈従文研究の歴史を概観し、その成果と問題点を検討する。

第二章「近代化する北京の沈従文――路面電車の描写をめぐって」では、北京における路面電車の開通をめぐる知識人および一般人の発言と、沈従文の電車を主題とする作品を論じる。1924年、大衆の生活改善を謳い文句に開通した北京の電車は、人力車夫の組合を含む京師総商会の強い要請により、庶民の乗物とはほど遠い高額の料金設定を余儀なくされる。一方、沈従文はこの電車の中で、自らの貧しい境遇を悲嘆するという、矛盾した内容の作品を発表する。こうした自己卑下は、当時の人気作家郁達夫の得意としたもので、論文は、この矛盾の背景には、時代の流行に敏感な、沈従文の「職業作家」としての意識があったことを指摘する。

第三章「沈従文と胡也頻――「職業作家」の挫折（1）」では、沈従文、胡也頻、丁玲の交流に焦点を当て、1925年の北京において青年たちが「職業作家」として生活していくことの困難を浮き彫りにする。胡也頻は沈従文と知り合ったのち、北京文壇の軋轢から『京報・民衆文芸』の編集を退き、故郷に帰った女性作家丁玲のあとを追って湖南へと向かう。沈従文も、ほぼ時を同じくして北京を離れ、天津、東北へと向かう。論文は、二人の旅立ちの原因として、作家生活の挫折と絶望があったことを指摘し、その背景には、1925年５月30日に上海で起こった五・三〇事件（租界警察による大衆運動弾圧事件。反帝国主義運動に発展）によって、作品発表の場が奪われるという、若い職業作家にとっての重大な危機があったことを指摘する。

第四章「沈従文と五・三〇運動――「職業作家」の挫折（2）」では、沈従文が五・三〇運動期にどのような行動をとり、どのような作品を残したかを論じる。まず、当時の沈従文が作品発表の場としていた『晨報副刊』の編集傾向を分析し、掲載作品のほとんどが五・三〇事件関連の報道で占められていたことを指摘する。ついで、運動の波に乗った学生たちの文学活動と沈従文の作品について論じ、これまで湘西の人々の生命力を讃えるものと評価されてきた散

文「卑怯者の筆記・鶏鳴」（1925）あるいは詩「墓場へ」（同）「墓場への道」（同）には、作品発表の場を奪われた沈従文の、功利的な学生作家に対する、呪詛に近い批判が込められていることを明らかにする。

第五章「沈従文と周作人――新文学の“硬化現象”と湘西の民謡」では、功利的な学生作家を厳しく批判した沈従文が、自身、どのような文学の創作を目指していたのかを考察する。沈従文は1925年、故郷湘西の語彙をふんだんに取り入れた方言詩「田舎の夏」を発表する。一方、当時の新聞や雑誌の主流となっていたのは、学生たちによる硬直した表現――西洋文学直輸入の生硬な語彙――であり、沈従文は方言を用いた新鮮かつ柔軟な表現によって、学生たちの動きや文学を批判したのであると主張する。

第六章「沈従文と徐志摩――「真の経験」と「想像力」」では、当代一流のエリート徐志摩との交流を通し、沈従文が「職業作家」としての歩みを確実なものとしていく過程を検証する。徐志摩は、「真の経験」と「想像力」に重きを置くべきことを主張した詩人であるが、こうした文学観の背後には、労働人民を理解することができず、また想像力を刺激する小説が書けないというコンプレックスと、自らが受けた教育への懐疑があったとし、徐志摩は自らの経歴と対照的な道を歩んできた青年沈従文と知りあうことによって、その人生と才能――想像力の豊富さ、イメージ喚起力の強さを高く評価したのであるとする。一方、沈従文については、徐志摩との出会いによって、田舎育ち、兵士出身、無学歴といった強いコンプレックスの原因を、逆に強力な武器に変えたのであるとし、故郷の「湘西」を舞台にした小説群は、故郷を描くことに主眼があるのではなく、新たな表現の獲得を目指した、文学的実験の結果として生み出されたものであると指摘する。

第七章「沈従文と劉夢葦――沈従文と新詩（１）」および第八章「沈従文と聞一多――沈従文と新詩（２）」では、劉夢葦および聞一多との関係に注目し、沈従文の方言詩「還願」の表現を論じる。劉夢葦は、新詩の形式運動の先駆者であり、聞一多は自宅の黒塗りの部屋で詩の朗読会を開き、新詩形式運動を実践していた詩人である。論文は、劉夢葦が新詩の形式を整えることを主張した背景には、胡適ら一世代上の文学者たちへの反抗があったとし、聞一多の部屋の、黒塗りに金枠のデザインは、中国が物質文明に毒された“死”から復活することをモチーフにしたものであり、同じく黒地に金の装幀をもつ詩集『死水』にも、同様のモチーフが存在していることを指摘する。沈従文は、聞一多の詩集を高く評価し、影響を受けるほか、聞一多の詩の朗読会にも参加し、これを母体とする文芸紙『晨報・詩鐫』に三首の詩を発表している。論文は、そのうちの一首「還願」（1926）を取り上げ、民謡の手法を取り入れて湘西の儺戯の様子をうたったこの詩が、実はリズムを意識的に単調にすることによって田舎の雰囲気を演出する一方、英詩の韻律をも取り込んでいることを明らかにし、「還願」は湘西の民謡そのままではなく、むしろ湘西の民謡を取り入れた「新詩」であり、農村の文学を装った「都市の文学」である、と結論づける。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　須　藤　洋　一

副　査　　教　授　　武　田　雅　哉

副　査　　教　授　　神　谷　忠　孝

学位論文題名

沈　従　文

――作家の形成――

本論文は、近代中国の作家、沈従文の初期の文学活動に焦点を当て、学歴を持たない地方出身の一青年が、北京のジャーナリズムを舞台に、いかにして作家としての形成を成し遂げていったかを論じたものである。

この問題を考察するにあたって、本論文は以下のような視点と方法とを採用した。

第１に、沈従文の作品については、従来、故郷の辺境地帯、いわゆる「湘西」を舞台にした小説のみが高く評価され、研究の対象となっていたのに対して、本論文はこれまで「習作」としてほとんど顧みられることのなかった、都市に取材した作品（詩、散文、小説）を重視し、考察の対象とする。

第２に、「職業作家」あるいは「投稿家」としての沈従文に視点をすえ、組織に属さない不安定な身分のあり方と、作品の傾向との関係に着目する。

第３に、周囲の作家や詩人、文学志望の青年とのあいだで交わされた接触、交流の様相に注目し、作家が多様な言語的、文化的な環境の中で行なった文学的実験の軌跡を追求する。

以上の視点、方法自体、過去の沈従文研究とは明白に異なる画期的なものであるが、本論文はこうした新たな方法を採用することによって、「故郷」に対して親和的な作家であるという、沈従文についての従来のイメージを大きく覆し、これを「都市の作家」として提示することに成功した。本論文によれば、沈従文にとって作家への歩みとは、まず第一に、学歴も安定した職もない都市の「浮遊分子」が、自身の生のありようを表現することによって、自らの生命を維持しようとする過程であり、同時に、無教養、無学歴という自らのコンプレックスを払拭し、学生らから受ける差別感をはね返す過程でもあったとされる。これを文学上の実践のレベルとして表現すれば、それは社会的に認知された学者、学生による硬直化した文学に反抗し、「真の体験」と「想像力」とに基づく新たな文学を創造しようとする一個の文学的な実験の過程であった、というのが本論文の基本的な趣旨である。社会的な関係の中で、一人の青年作家の成長を多角的に捉えて見せた点、本論文の功績は十分に評価されてよい。

他方、本論文はこうした独自の結論を導く個別の論においても、過去に例を見ない、斬新な見解を随所で示している。たとえば、「反帝反封建」を叫ぶ学生作家に対して、沈従文は「職業作家」としての立場から厳しい視線を向けていたのだとする第三、四、五章の指摘、あるいは、徐志摩との出会いによって、沈従文はみずからのコンプレックスの根源を、逆に文学的武器へと逆転したのだとする第六章の指摘、さらには、沈従文の農村文学の装いの奥には、緻密に構想された都市の文学が隠されているとする第八章の作品解読等、いずれも大胆な主張であるが、それらは周到かつ慎重な手続きを経た上での指摘であり、その論理はきわめて説得的である。

本論文は、沈従文を主題とした長大な伝記の一部として構想されたものであり、叙述には、

作品論の展開が十全でないなど、若干の欠陥は見られるものの、作者が目指した新たな作家像の提示と、初期の作品の新たな解釈、および作品群全体の位置づけの変更という目標は、この論文において、すでに十分な確証を得ていると言ってよい。その意味で、本論文は従来の沈従文研究の水準をはるかに超えるものであり、他の作家研究への貢献も大きい。博士論文というにふさわしい成果を上げたものと考えられる。

以上の結果により、当委員会は全員一致で、申請者齊藤大紀氏に対し、博士（文学）の学位を授与することが相当であるとの結論に達した。